

各関係機関長 殿  
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター  
病虫害防除所長  
(公印省略)

平成19年度農作物病虫害発生予察情報について

平成19年度農作物病虫害発生予報第13号を發表したので送付します。

平成19年度農作物病虫害発生予報第13号

平成20年2月27日  
徳島県

I. 果樹  
果樹共通

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年並

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや少ない(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 前年夏～秋期における予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、平年より少なめで推移した。

(2) 2月に実施した果樹カメムシ類の調査(11地点×2ヶ所調査)では越冬成虫を認めなかった。昨年(11地点×2ヶ所調査では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.09頭/m<sup>2</sup>)、一昨年(10地点×2ヶ所の調査では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.15頭/m<sup>2</sup>)と比べて越冬密度が低かった。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が8.9%、発病度が0.3)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

(2) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。

(3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。

(4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。

(5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

## 灰色かび病

### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや少ない(前年より少ない)

### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が39.8%、発病度が6.9)。
- (2) 2月22日発表の1ヶ月予報では、平年と同様に晴れの日が多く、予報期間の前半は気温の変動が大きいと見込まれており、発生に中立的である。

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 発病果や花卉などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## 葉かび病

### 1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年並～やや多い(前年よりやや多い)

### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が25.0%、発病度が13.5で、平年(28.1%、4.3)より発病度が高かった。
- (2) 2月22日発表の1ヶ月予報では、平年と同様に晴れの日が多く、予報期間の前半は気温の変動が大きいと見込まれており、発生に中立的である。

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20～25℃の比較的低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 肥料切れが病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。
- (5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## タバココナジラミ(バイオタイプB, バイオタイプQ)

### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の同時期も未発生)。

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) コナジラミ類が発生している苗は使用しない。
- (2) 圃場周辺の雑草は増殖源となるので、除草を徹底する。
- (3) 施設開口部(出入り口、天窗、ハウスサイド)に0.4mm以下の防虫ネットを被覆し、昇温抑制のため循環扇を設置するとともに、紫外線カットフィルム(侵入防止)、黄色粘着紙(誘殺)、光反射マルチ(忌避)などの物理的防除法を活用する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。
- (5) バイオタイプQは、バイオタイプB(シルバーリーフコナジラミ)に比べ、ピリプロキシフェン剤(商品名：ラノー)、ネオニコチノイド系剤の一部(商品名：アドマイヤー、アクタラ、ダントツなど)、合成ピレスロイド系剤に対する感受性が低いことが報告されている。したがって、これらの薬剤による防除効果が低い場合は、他の薬剤に切り替える(有効な薬剤の種類については、平成18年12月20日付け平成18年度特殊報第1号を参照し、最新の登録内容を確認する)。
- (6) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- (7) 栽培終了後は成虫の施設外への分散を防ぐため、薬剤防除を行ったうえで株を切断し、施設を密閉して蒸し込み、虫を死滅させる。

## オンシツコナジラミ

### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

### 2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、寄生葉率が4.8%で、ほぼ平年(52.4%、6.9%)並の発生であった。

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているため、葉液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## 冬春ナス

### 灰色かび病

#### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

#### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が19.0%、発病果率が0.5%)。
- (2) 2月22日発表の1ヶ月予報では、平年と同様に晴れの日が多く、予報期間の前半は気温の変動が大きいと見込まれており、発生に中立的である。

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花卉などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

### うどんこ病

#### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

#### 2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の同時期も未発生)。

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

### すすかび病

#### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや少ない(前年よりやや少ない)

#### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、発病葉率が3.7%で、平年(70.0%、14.3%)より少なめの発生であった。
- (2) 2月22日発表の1ヶ月予報では、平年と同様に晴れの日が多く、予報期間の前半は気温の変動が大きいと見込まれており、発生に中立的である。

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃くらいで多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### アブラムシ類

##### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

##### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が1.0%、寄生葉率が0.01%)。

##### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### ミナミキイロアザミウマ

##### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや少ない)

##### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が10.3%、寄生葉率が1.0%)。

##### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### オンシツコナジラミ

##### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや多い)

##### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.3%で、ほぼ平年(16.0%、2.2%)並の発生であった。

##### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### ハダニ類

##### 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

##### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が2.0%、寄生葉率が0.1%)。

##### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### 冬春ホウレンソウ

##### べと病

##### 1) 予報の内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや少ない(前年より少ない)

##### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が20.0%、発病度が0.3で、平年(19.0%、3.8)より発病度が低かった。
  - (2) 2月22日発表の1ヶ月予報では、平年と同様に晴れの日が多く、予報期間の前半は気温の変動が大きいと見込まれており、発生に中立的である。
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 品種は、本病レース1～7に抵抗性があるものを利用する。
  - (2) 葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
  - (3) 春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。
  - (4) 薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
  - (5) 罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているため、速やかに処分する。

#### アブラムシ類

- 1) 予報内容  
発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや多い)
  - 2) 予報の根拠  
(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が30.0%、発生程度指数が0.3で、ほぼ平年(28.5%、1.6)並の発生であった。
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬剤が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
  - (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### 冬春イチゴ

##### 灰色かび病

- 1) 予報内容  
発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)
  - 2) 予報の根拠  
(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が14.3%、発病果率が0.1%で、ほぼ平年(6.2%、0.2%)並の発生であった。  
(2) 2月22日発表の1ヶ月予報では、平年と同様に晴れの日が多く、予報期間の前半は気温の変動が大きいと見込まれており、発生に中立的である。
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
  - (2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。
  - (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

##### うどんこ病

- 1) 予報内容  
発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)
  - 2) 予報の根拠  
(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、発病葉率が0.1%、発病果率が1.1%で、平年(4.1%、0.2%、0.2%)よりやや多めの発生であった。
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
  - (2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。
  - (3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
  - (4) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### アブラムシ類

- 1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並～やや多い)

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が21.4%、寄生株率が1.0%で、ほぼ平年(9.1%、1.2%)並の発生であった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、寄生葉率が1.9%で、平年(20.1%、3.1%)より発生圃場率が高かった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

III. その他

1. 燃料価格が高騰していますが、施設栽培において最低気温の設定値を下げすぎると、低温性病害の発生を著しく助長する場合がありますので、ご注意ください。
2. 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

**発生量の表示**

**発生程度：甚>多>中>少>無**

**発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない**

テレホンサービス 0883 (26) 1199

ホームページ <http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

病害虫の発生予報、発生状況、防除法等をお知らせしています。